

2022年3月20日  
(令和3年度修了生)

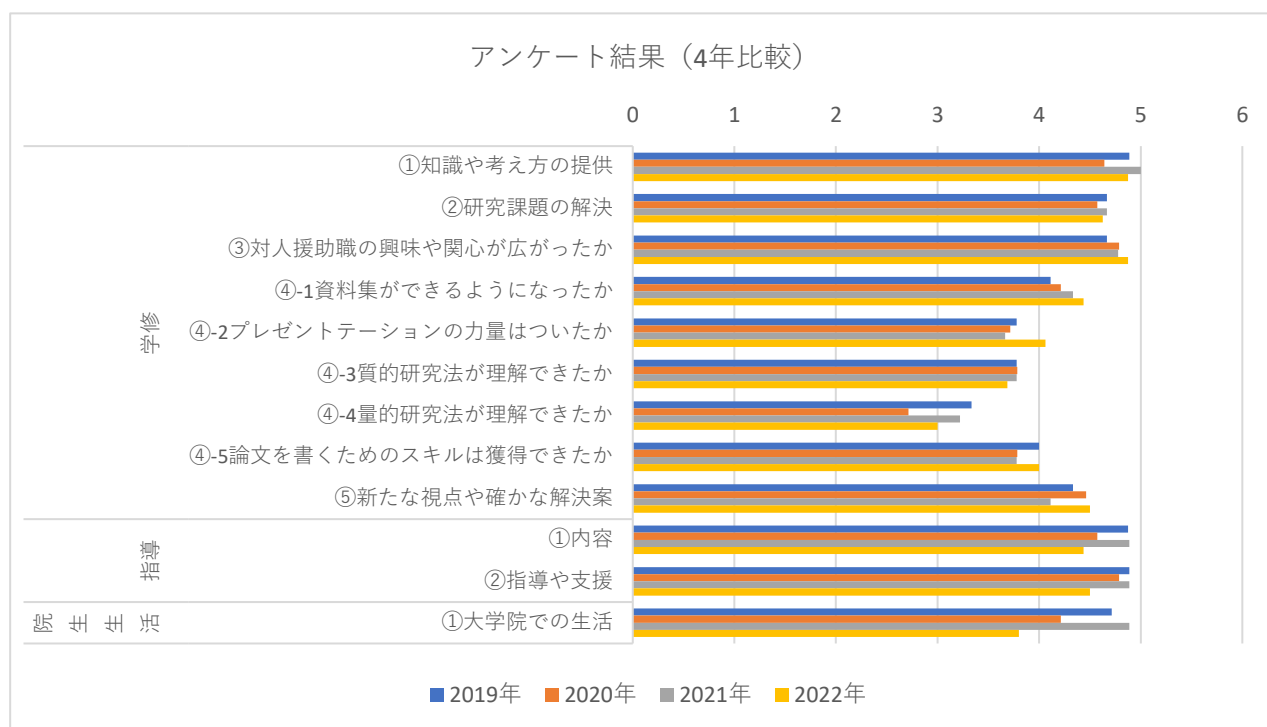
武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 修了アンケート結果(修士16名、博士1名)\*

項目	設問	評価*					2022平 均	2021平 均	2020平 均	2019平 均
		1	2	3	4	5				
学修を振り返って	①新たな知識や考え方を提供したか。	0	0	0	2	13	4.9	5.0	4.6	4.9
	②専門分野の問題や研究課題の解決に活用できたか	0	0	0	6	9	4.6	4.7	4.6	4.7
	③対人援助職の広範な取り組みに興味や関心が広がったか	0	0	0	2	13	4.9	4.8	4.8	4.7
	④_1資料集ができるようになったか	0	0	1	6	8	4.5	4.3	4.2	4.1
	④_2プレゼンテーションの力量はついたか	0	0	4	6	5	4.1	3.7	3.7	3.8
	④_3質的研究法が理解できたか	1	0	6	4	4	3.7	3.8	3.8	3.8
	④_4量的研究法が理解できたか	3	2	4	4	2	3.0	3.2	2.7	3.3
	④_5論文を書くためのスキルは獲得できたか	0	0	3	9	3	4.0	3.8	3.8	4.0
	現場で生じる様々な課題や問題についての新たな視点や確かな解決案が考えられたか	0	0	1	6	2	4.5	4.1	4.5	4.3
教員の授業や研究指導について	①大学院の授業は充実した内容だったか	0	0	2	4	9	4.5	4.9	4.6	4.9
	②研究に対する指導教員の指導やゼミの院生の支援は、充実していたか	0	0	3	2	10	4.5	4.9	4.8	4.9
院生生活について	①大学院での生活(授業や研究の環境も含め)は、充実していたか。	1	1	2	5	5	3.9	4.9	4.2	4.7

※修士修了生16名。15名から回収。(回収率94%)博士修了生1名。全員から回収。(回収率100%)

※1-5の5段階評価で、5が最も高い評価

※博士修了者は1名のため、上の集計表には掲載していませんが、自由記述には反映させています。



## 1. あなたの学修を振り返って

### ① 大学院での学修はあなたに新たな知識や考え方を提供しましたか(特に新たに習得した知識や考え方)

- ・心理学、コミュニケーションなど今まで深く学んだことがなく、新鮮な気持ちで学び、考えも変わった。
- ・自分の関心のなかったジェンダーや子どもの育ちなどについても知ることができた。
- ・他の職種の方と一緒に学べたことが新たな知識や考えにつながった。
- ・対人援助する時は、自分にも影響があること
- ・実践していることを可視するための考え方 論文の問いの立て方

### ② 大学院での学修はあなたの専門分野の問題や研究課題の解決に活用できましたか(特に活用できた点)

- ・深く、多角的に何度も繰り返し見つめ直すこと (の大切さ)
- ・臨床に生かせる理論が(自分の中に)できた。 ・最新の情報を得ることができたこと
- ・インタビューを通して、その人の思いを解釈することができた。
- ・看護教育とはということを、「教育」という原点から考えることができた。
- ・整合性のある文章を書くということ、客観的に結果を示すということなど、学ばせていただいた。

### ③大学院での学修を通して、対人援助職の広範な取り組みに興味や関心が広がりましたか(特に興味や関心が広まった点)

- ・コミュニケーションの難しさと面白さ。自分が思っている以上に人の気持ち、考えは難しいこともあるということを改めて考えることができた
- ・当事者主体の支援 (の大切さ、難しさ)
- ・学習理論や自己効力感など、過去の研究を生かして自分の新しい発見を説明する点

### ④アンケートや聞き取り、資料収集などの方法やその読み書き、分析の方法、さらにプレゼンテーションの力量はつきましたか。特に身についたと感じるのはどんな点ですか。

- ・資料を読み解くこと。プレゼンテーションなど一からのスタートで、よく頑張ったと思う。
- ・資料収集、論文検索の方法、量的研究の方法、論文の組み立て方 ・論文を読み込むことの大切さ
- ・初めて主となり研究を進めたので、全てが学習となった。今後は少しは自信を持って、職場において指導する立場になれるかも。 ・分析方法を学び、活用できるような気がしている。
- ・論文を統一したものとする力

### ⑤大学院での学修を通して、現場で生じる様々な課題や問題についての新たな視点や確かな解決策が考えられましたか。(解決策として提案したいこと)

- ・現代の目の前の課題だけでなく、歴史、背景からも見つめ直すこと ・支援対象者に寄り添うこと
- ・視点は狭いものだったと気づかされるが多かった。議論する大切さを身に染みて感じた。
- ・現場教育をするためには、経験だけでなく基礎知識、応用する力が必要であること。
- ・次は、看護教育という分野で自身の課題を解決していきたいと思う。
- ・これまでの経験を個人の内に留めておくのではなく、みんなで共有できる形にしていくこと

## 2.教員の授業や研究指導について

### ①大学院での授業は、充実した内容でしたか(特に良かった点や改善すべき点)

- ・多角的な視野をもつこと ・理論と臨床の統合
- ・他人のプレゼンを聞く、話を聞く事で自分にはない発想などがあり、学ぶことが多かった。
- ・コロナ禍ではありましたが、リモートがより話し合える場となりました。とても充実しておりました。
- ・対面でディスカッションできたことは、やはり嬉しかった。
- ・オンライン授業となり先生方も大変だったと思いますが、非常に工夫した内容のある授業でした。ありがとうございました。
- ・オンラインでしたが、仕事と学業が両立することができました。

### ②あなたの研究に対する指導教員の指導やゼミの院生の支援は充実していましたか。(特に良かった点や改善すべき点)

- ・いつも面白がって、かつ、「ここを・・・」と鋭い指摘をくださり、本当に感謝しております。
- ・思ってた以上に気さくに話せ、相談できた。いつも気にかけて下さり、親身になって下さった。もっと色々ゆっくり話したかった。 ・優しくかった。何度も添削して下さいました。 ・的確な指導が受けられた。
- ・先生をはじめ、ゼミの皆さまには大変ご支援いただきました。
- ・指導教員以外の指導をもっと自由に受けることができると良い。質的研究をもっと深く学びたかった。

## 3.大学院での院生生活についてお尋ねします。

### ① 大学院での生活(授業や研究の環境も含め)は充実していましたか。(特に良かった点や改善すべき点)

- ・やはりコロナでのオンラインより、対面が良かったです。でもオンラインで助かることも多々ありました。
- ・助手さんには何から何までお世話になりました。申し訳ない限りです。
- ・オンライン授業は不十分な情報。図書館利用を制限された時期もあった。
- ・学友とともに学びました。 ・コロナ禍で充分とは言えなかった(仕方ない)

### ②大学院生活で、楽しかったことや思い出に残っていることをご自由にお書きください。

- ・オンラインでも話し合いをしていけるものだと思った。様々な分野の方と出会え、貴重な体験となった。
- ・授業、勉強するのが楽しかった。 ・同級生が多く、学生気分を満喫できた。
- ・全てが思い出に残っています。ありがとうございました。
- ・研究室でたくさんのご指導、お話ができたことがよい思い出となっています。充実の時間をいただきました。
- ・ゼミメンバーで助け合ったこと。院生とはあまり交流なかったが SNS で共有することはできたこと。
- ・先生方や学生のみなさんと色々なお話をし、意見交換ができたこと。
- ・オンラインで出会うことが多かったですが、助け合いながら卒業することができました。
- ・1年生の時の課題レポートを作成する時に、自分と向き合うことができた。
- ・2021年3月、PCR検査のため薬学部まで行き遠かったこと。中央キャンパスのCafé、キッチンカーに並んだこと。盆栽セミナー、フィットネスと大学院生活を楽しまました。

## 教員から

### 1. 「学修」に関して

まず、5段階評価については、これまでの修了生評価と大きく異なっていなかったため、ひと安心です。2021年度の修士修了生は、入学時からコロナ禍となったため、対面授業が中止されてリモート中心の授業が1ヶ月以上遅れて始まりました。教員も学生も初めての経験ばかりで、教員にとっては授業準備や授業の進め方など、戸惑うことも多く、手探りの中で授業を始めました。学生の皆さんも同様、あるいはそれ以上に緊張しながら大学院生活をスタートされたと思います。特に、学校、医療、福祉などの現場で働く院生が多いため、職場での緊張も強く、精神的にも肉体的にも非常にたいへんであった、苦労されたことと拝察します。また実際、院生との会話の中で、そのような話しをよく耳にしました。少し緩んできたとは言え、2年間、そうした状況が継続したのですから、職場や家庭においても、研究を行う上でも、これまでの院生以上に大きな負担がかかったかと思います。本当に、お疲れさまでした。よく頑張られました。

学修に関する自由記述を見ますと、初めての学びの面白さや楽しさ、他職種の院生の交流、多角的な視点をもつことの大切さ、研究に触れた際の難しさとともにその知識や技能を身につけていくことの楽しさ、充実感が伝わってくるように思います。文献検索、論文の読み方、先行研究のまとめ方、研究計画の立て方、倫理審査、研究実施に際してはアンケート作成やインタビューガイドの作成、結果の分析の仕方（分析方法）、論文としてのまとめ方（一貫性など）、論文の形式等など、たくさん学ぶことがあったと思います。自分には、あまり身につけていない点を知ること、今後の研究進展には大切なことです。研究には限界がありません。皆さんが学んだこと、身につけたことはその第一歩にすぎませんので、これを礎として、次につなげていってください。それには継続が一番です。今できる研究を見つけ、取組んでみてください。行き詰まったり、他者の意見を聞きたくなくなったりすれば、相談にお越しくください。お待ちしております。

### 2. 「授業や研究指導」について

さすが社会人、暖かな言葉がけを有り難うございます。長年、教員は対面で授業や研究指導を行って来ましたので、対面であるからこそ伝わること、読み取れることも多くあることが分かっていますので、リモート中心の授業には、隔靴搔痒の思いもありました。学生の皆さんも同様であったと思います。とはいえ、コロナ禍という状況、社会人学生の負担の大きさを考えれば、やむを得なかったですね。

制限された状況の中での研究となってしまいましたので、学生さんはインタビュー調査にしてもリモートで実施せざるを得ず、たいへんであったともいます。リモートでも実施はできますし、遠くの方にも話を聞ける利点もありますが、得られる情報量が対面とリモートではかなり異なります。今度、インタビューを行う機会があれば、是非、対面で行ってみてください。質的研究はすぐに身につくものではありません。ある程度の経験が必要となりますし、多角的な視点を持てるかも問われます。研鑽を積んでください。

今からでも結構ですから、「もっとこうしてほしい」といった具体的な意見もお寄せください。

### 3. 「院生生活」について

2020年度、2021年度と、コロナ禍となってからの修了生の評価はどうしても低くなってしまいます。授業がリモートになったことで、大学の内・外ともに、院生同士、院生と教員の交流は制限されてしまいました。6月にあった教員・院生親睦のための交流会は開催できず、卒業記念パーティも中止、講演会やシンポジウムもリモート開催となりました。学外での食事や飲み会などの機会もほとんど持てませんでした。残念です。そうした中でも、院生同士の交流や助け合いがなされたとのこと、安堵しました。

もう学割は使えませんが、今後とも同期生やゼミでの交流（勉強会や食事会など）を楽しんでください。